

時に埋もれた山中寺院「般若寺」(はんにゃじ)

前回は源平争乱と斎藤実盛について触れましたが、片上地区にあったとみられる「方上荘」(かたかみのしょう)では平安時代末期になると生江氏(いくえし)に代わって齋藤氏が実権を握り、鎌倉幕府成立後も荘官として支配権を維持したようです。

さて、この方上荘は藤原氏の荘園であったことから同氏の氏神である春日大明神を勧請して総社(現吉谷町の春日神社)として祀り、その別当寺として般若寺という寺が置かれました。般若寺は別所町の山奥に築かれ、坊舎が存在したとみられる広大な平坦地が現在も階段状に残されています。平成11年の発掘調査では建物跡や陶磁器が発見され、往時の繁栄ぶりが断片的ではあるものの明らかになっています。古文書によれば、般若寺は泰澄が創建し、後に楞嚴寺の高僧が堂舎仏閣を建立して再興したといえます。青木氏によると別所町の般若寺跡は再興後のもので、元の般若寺については吉谷町の山中に伝わる般若寺跡にその可能性を見出しています。先の発掘調査でも平安時代にさかのぼる遺物は発見されていないため、その可能性は十分に考えられます。

別所町の般若寺跡を訪れる人は今はなく、遺跡はひっそりと眠っています。

参考 青木豊昭「文殊山とかたかみ」 (文化課 深川義之)



別所町般若寺跡の発掘調査風景 (H11 撮影)